令和元年度 集積回路設計技術·次世代集積回路工学特論資料

微細化による特性への影響

群馬大学 松田順一

概要

- チャネル長変調
- ・ 短チャネルデバイス
 - 短チャネル効果(電荷配分)、ドレイン~ソース電圧の効果、逆短チャネル効果
- 狭チャネルデバイス
 - 狭チャネル効果、逆狭チャネル効果
- ・パンチスルー
- キャリア速度飽和
- ホットキャリア効果
- ・スケーリング
- ソースとドレイン抵抗
- 薄い酸化膜と高ドーピング効果
- ・ 微細物理モデルの統合
- 付録
 - BSIMでの閾値電圧(短チャネル効果:擬似2次元)
- (注)以下の本を参考に、本資料を作成。
- (1) Yannis Tsividis, Operation and Modeling of the MOS Transistor Second Edition, McGraw-Hill, New York, 1999.
- (2) Yannis Tsividis and Colin McAndrew, Operation and Modeling of the MOS Transistor Third Edition, Oxford University Press, New York, 2011.



(CLM: Channel Length Modulation)



ピンチオフ領域の長さ導出(1次元解析)

チャネル方向x:ドレイン方向正)のポアソンの方程式を解く。

ピンチオフ点をx=0とし、境界条件を

 $\mathbf{E} = -\mathbf{E}_1 \quad (x = 0)$

ピンチオフ領域にかかる電圧:V_{DS}-V_{DS}

とすると、ピンチオブ領域の長さ1,は

$$l_{p} = \sqrt{\frac{2\varepsilon_{s}}{qN_{A}}} \left[\sqrt{\phi_{D} + \left(V_{DS} - V_{DS}\right)} - \sqrt{\phi_{D}} \right]$$

$$\phi_D = \frac{\varepsilon_s \mathrm{E}_1^2}{2qN_A}$$

(注) ピンチオフより先にキャリア速度飽和が起こる場合、 E₁をそれが起こる電界の値に置き換える。

チャネル長変調による飽和電流(1)

飽和領域の電流 I_{DS} は、 l_p を用いて以下の如く表される。

$$I_{DS} = I_{DS} \frac{L}{L - l_p} \qquad \text{stat} \quad \frac{I_{DS}}{1 - l_p/L}$$

 $l_p/L \ll 1$ の場合、

$$I_{DS} \approx I_{DS} \left(1 + \frac{l_p}{L}\right)$$

で近似できる。(この形がコンピュータ計算上好まれる。) ここで、*l*,を以下の形にして用いる。

$$l_{p} = \frac{B_{1}}{\sqrt{N_{A}}} \left[\sqrt{\phi_{D} + \left(V_{DS} - V_{DS}^{'}\right)} - \sqrt{\phi_{D}} \right]$$

 $B_1 = (2\varepsilon_s/q)^{1/2}$ で定数であるが、これと ϕ_D は、実測値(電流)に合うように選ばれる。

チャネル長変調による飽和電流(2)

I_{DS}は、以下となる。

$$I_{DS} \approx I_{DS}^{'} \left(1 + \frac{l_{p}}{L}\right) \approx I_{DS}^{'} \left[1 + \frac{1}{L\sqrt{N_{A}}} \frac{B_{1}}{2\sqrt{\phi_{D}}} \left(V_{DS} - V_{DS}^{'}\right)\right] = I_{DS}^{'} \left[1 + \left(V_{DS} - V_{DS}^{'}\right)/V_{A}\right]$$

となる。ここで、 V_A は以下で表される。 $V_A = B_2 L \sqrt{N_A}$, (但し、 $B_2 = 2 \sqrt{\phi_D} / B_1$)

チャネル長変調による飽和電流(3)

飽和電流
$$I_{DS}$$
を以下のようにも表す。
 $I_{DS} = I_{DS}^{'} \left[1 + \left(V_{DS} - V_{DS}^{'} \right) / \left(V_{A} + V_{DS}^{'} \right) \right]$
または、
 $I_{DS} = \hat{I}_{DS} \left[1 + \left(V_{DS} - \hat{V}_{DS} \right) / \left(V_{A} + \hat{V}_{DS} \right) \right]$ (V,

$$I_{DS} = \hat{I}_{DS} \left[1 + \left(V_{DS} - \hat{V}_{DS} \right) / \left(V_A + \hat{V}_{DS} \right) \right] \qquad (V_{DS} > \hat{V}_{DS})$$
$$\hat{I}_{DS} = \frac{W}{L} \mu C'_{ox} \left[\left(V_{GS} - V_T \right) \hat{V}_{DS} - \frac{\alpha}{2} \hat{V}_{DS}^2 \right]$$

上記の飽和領域と以下の非飽和領域の電流式

$$I_{DS} = \frac{W}{L} \mu C_{ox} \left[(V_{GS} - V_T) V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^2 \right] \qquad (V_{DS} \le V_{DS})$$

 $\mathcal{O}dI_{DS}/dV_{DS}$ を等しいとして \hat{V}_{DS} を求めると、以下になる。 $\hat{V}_{DS} = V_A \left[\sqrt{1 + \frac{2(V_{GS} - V_T)}{\alpha V_A}} - 1 \right]$



ピンチオフ領域の長さ導出(:2次元解析)

2次元解析により*l*_pを導出すると、*l*_pは以下になる^{*}。

 $l_{p} = l_{a} \ln \left[1 + \frac{V_{DS} - V_{DS}}{V_{E}} \right]$ となる。 V_{E} は実験的に決められる。

*Y. A. Elmansy and A. R. Boothroyd, "A Simple two-dimensional model for IGFET operation in the saturation region," IEEE Transaction on Electron Devices, vol. ED-24, pp.254-262, 1977.

チャネル長の違いによる I_{DS} vs. V_{GS} 特性



短チャネル効果(電荷配分:1)

短チャネルトランジスタの実効閾値電圧 V_T は、

$$\hat{V}_{T} = V_{FB} + \phi_{0} + \frac{\hat{Q}_{B1}}{\hat{Q}_{B}} \gamma \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}}$$

である。ここで、 \hat{Q}_{B1} は実効空乏層電荷であり、
 \hat{V}_{T} はまた、
 $\hat{V}_{T} = V_{T} + \Delta V_{TL}$
で表される。ここで、

$$\Delta V_{TL}(V_{SB}) \qquad \stackrel{\wedge}{V_T}(V_{SB})$$

$$V_T = V_{FB} + \phi_0 + \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}, \qquad \Delta V_{TL} = \left(\frac{\dot{Q_{B1}}}{\dot{Q_B}} - 1\right) \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}$$

である。 ΔV_{TL} は閾値電圧の変化量を表す。

 V_{SB}



短チャネル効果(電荷配分:2) \hat{O}_{a}/O_{b} の導出: 空乏層幅 d_{a} は $d_{B} = \zeta \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} \quad \left(4 \boxplus \bigcup, \zeta = \sqrt{\frac{2\varepsilon_{s}}{qN_{A}}} \right)$ である。これを使うと $\hat{Q_B}/Q_B$ は $\hat{Q}_{B}^{'}/Q_{B}^{'} = 1 - \frac{d_{j}}{L} \left(\sqrt{1 + \frac{2d_{B}}{d_{j}}} - 1 \right)$ となる。 $2d_B/d_i \ll 1$ の場合、 $\hat{Q_B}/Q_B$ は $\hat{Q}_{B}^{'}/Q_{B}^{'} \approx 1 - \frac{d_{B}}{L}$ で近似される $2d_B/d_i$ が大きい場合も考慮して、以下で表す。 $\hat{Q}_{B}^{'}/Q_{B}^{'}=1-\beta_{1}\frac{d_{B}}{I}$ (但し、 β_{1} は定数)

短チャネル効果(電荷配分:3) β_{B} を含む \hat{Q}_{B} / Q_{B} の近似式を用いると \hat{V}_{T} は $\hat{V_T} = V_{FB} + \phi_0 + \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}} \left(1 - \frac{\beta_1 \zeta}{L} \sqrt{\phi_0 + V_{SB}} \right)$ となる。また、 ΔV_{τ} は以下の如くになる。 $\Delta V_{TL} = -2\beta_1 \frac{\mathcal{E}_s}{\mathcal{E}} \frac{t_{ox}}{L} (\phi_0 + V_{SB})$ $\Delta V_{\tau\tau} \propto 1/L$

短チャネル効果(ドレイン~ソース電圧の影響)

ドレイン電圧が増大した場合、 \hat{Q}_{B} / Q_{B} は以下になる。

$$\hat{Q}_{B}/Q_{B} = 1 - \beta_{1} \frac{1}{L} \frac{d_{BS} + d_{BD}}{2}$$
 (但し、 β_{1} は定数)

ここで、d_{BS}とd_{BD}はそれぞれソース側とドレイン側の空乏層幅であるため、

$$\frac{d_{BS} + d_{BD}}{2} = \frac{\zeta}{2} \left(\sqrt{\phi_0 + V_{SB}} + \sqrt{\phi_0 + V_{DB}} \right) \quad (\triangleq \ \ \cup \ \ V_{DB} = V_{DS} + V_{SB} \right)$$
$$\cong \zeta \left(\sqrt{\phi_0 + V_{SB}} + \frac{\beta_2 V_{DS}}{\sqrt{\phi_0 + V_{SB}}} \right) \quad (\triangleq \ \ \cup \ \ \beta_2 = 0.25)$$

となる。上記近似は V_{DS} が小の場合に成り立ち $\hat{V_T}$ と ΔV_{TL} は以下になる。

$$\hat{V}_{T} = V_{FB} + \phi_{0} + \gamma \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} \left[1 - \frac{\beta_{1} \zeta}{L} \left(\sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} + \frac{\beta_{2} V_{DS}}{\sqrt{\phi_{0} + V_{SB}}} \right) \right]$$
$$\Delta V_{TL} = -2\beta_{1} \frac{\varepsilon_{s}}{\varepsilon_{ox}} \frac{t_{ox}}{L} \left[(\phi_{0} + V_{SB}) + \beta_{2} V_{DS} \right]$$

短チャネル効果(ドレイン~ソース電圧の影響:2次元解析)

擬似2次元解析によると、 ΔV_{π} は以下の如くになる^{*}。

 $\Delta V_{TL} \approx - \left[3 \left(\phi_{bi} - \phi_0 \right) + V_{DS} \right] e^{-L/\lambda}$

- ここで、 ϕ_{bi} はソースまたはドレインとチャネル間の接合電位であり、
- λ (特性長: Characteristic length) は以下である。

$$\lambda = \sqrt{\frac{\varepsilon_s t_{ox} d_B}{\varepsilon_{ox} \beta_3}}$$

ここで、 d_B はチャネル下の空乏層深さであり、 $\beta_3(\approx 1)$ はフィッティングパラメータである。 なお、上記 ΔV_{TL} は $L \gg d_B$ で成立する。

^{*}Z-H Liu, et. Al., "Threshold voltage model for deep-submicrometer MOSFET's," IEEE Transaction on Electron Devices, Vol. 40, pp.86-95, 1993.

ドレイン電圧/短チャネル化によるバリア低下

(DIBL: Drain Induced Barrier Lowering)



短/逆短チャネル効果



チャネル幅の違いによる I_{DS} vs. V_{GS} 特性



LOCOS分離の狭チャネル効果(1)

狭チャネルトランジスタの

実効閾値電圧Ŷ_Tは、

$$\hat{V}_{T} = V_{FB} + \phi_{0} + \frac{\hat{Q}_{B1}}{\hat{Q}_{B}} \gamma \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}}$$

である。ここで、 \hat{Q}_{B1} は、実効空乏層電荷であり、
 $\hat{Q}_{B1} / \hat{Q}_{B} > 1$ である。 \hat{V}_{T} はまた、

$$\hat{V}_T = V_T + \Delta V_{TW}$$

で表される。ここで、 $V_T \diamond \Delta V_{TW}$ は以下である。

$$V_T = V_{FB} + \phi_0 + \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}, \quad \Delta V_{TW} = \left(\frac{\dot{Q_{B1}}}{Q_B} - 1\right) \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}$$



狭チャネル効果(電荷配分)





LOCOS分離の狭チャネル効果(2)

LOCOSの場合、 \hat{Q}_{B1}/Q_{B} を以下の如く近似できる。

$$\frac{Q_{B1}}{Q_{B}} = 1 + \beta_4 \frac{\pi}{2} \frac{d_B}{W}$$

ここで、β4は通常1であり、フィティングパラメータとして用いる。

これから $\hat{V_T}$ は以下になる。

$$\hat{V}_{T} = V_{FB} + \phi_{0} + \gamma \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} \left(1 + \beta_{4} \frac{\zeta \pi}{2W} \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} \right)$$

また、 ΔV_{TW} は以下になる。

$$\Delta V_{TW} = \beta_4 \frac{\zeta \pi}{2W} \sqrt{\phi_0 + V_{SB}} \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}$$
$$= \beta_4 \pi \frac{\zeta \gamma}{2W} (\phi_0 + V_{SB}) = \beta_4 \pi \frac{\varepsilon_s}{\varepsilon_{ox}} \frac{t_{ox}}{W} (\phi_0 + V_{SB})$$

$d_{B} = \zeta \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}}$
$\zeta = \sqrt{\frac{2\varepsilon_s}{qN_A}}$
$\gamma = \frac{\sqrt{2q\varepsilon_s N_A}}{C_{ox}}$

狭/逆狭チャネル効果



STI分離の狭チャネル効果(1)

STIの場合の狭チャネル効果による $\hat{V_T}$ は、以下である。

$$\hat{V_T} = V_{FB} + \phi_0 - \frac{Q_B}{C_{ox}WL + 2C_F}$$

ここで、 C_F はフリンジング容量である。 $\hat{V_T}$ はまた、以下で表される。

$$\hat{V}_{T} = V_{FB} + \phi_0 - \frac{\hat{Q}_{B1}}{C_{ox}WL}$$

ここで、 \hat{Q}_{B1} は実効空乏層電荷である。上2式を比較して、以下を得る。

$$\frac{\hat{Q}_{B1}}{Q_{B}} = \frac{C_{ox}^{'}WL}{C_{ox}^{'}WL + 2C_{F}} < 1$$

STI分離の狭チャネル効果(2)

 C_{F} は、以下である^{*}。 $C_F = \frac{2\varepsilon_{ox}L}{\pi} \ln\left(\frac{2t_{Fox}}{t_{ox}}\right)$ ここで、 t_{For} はフィールド酸化膜厚である。この C_F から以下を得る。 $\frac{Q_{B1}}{Q_{D}} = \frac{W}{W + F}, \qquad \qquad \text{ill } \cup \nabla F = \frac{4t_{ox}}{\pi} \ln\left(\frac{2t_{Fox}}{t}\right)$ したがってŶrは、以下の如くになる。 $\hat{V_T} = V_{FB} + \phi_0 + \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}} \frac{W}{W + F}$

> * L. A. Akers, et. al., "Characterization of the inverse-narrow-width effect," IEEE Transaction on Electron Devices, vol. ED-34, pp. 2476-2484, 1987.









キャリアの速度飽和

キャリアの速度飽和を含む電流式

$$I_{DSN, 速度飽和を含む} = \frac{I_{DSN, 速度飽和を含まない}}{1+V_{DS}/(LE_c)}$$

電界が臨界電界より小: $|E_x| \ll E_c \Rightarrow |v_d| \approx \mu |E_x|$
電界が臨界電界より大: $|E_x| \gg E_c \Rightarrow |v_d| \approx |v_d|_{max}$

臨界電界:
$$E_c = \frac{|v_d|_{\max}}{\mu}$$



キャリア速度飽和の解析(1)

 $|v_d|$ を経験的な以下の関係式で表す。

$$\begin{split} |v_{d}| &= |v_{d}|_{\max} \frac{|E_{x}|/E_{c}}{1 + |E_{x}|/E_{c}} \\ \Box \subset \mathcal{O} \setminus E_{x}| &= dV_{CB}/dx \mathcal{O} \mathfrak{S} \mathfrak{S} \mathfrak{S} \mathfrak{S} \mathfrak{S}, \\ |v_{d}(x)| &= |v_{d}|_{\max} \frac{(1/E_{c})(dV_{CB}/dx)}{1 + (1/E_{c})(dV_{CB}/dx)} = \mu \frac{(dV_{CB}/dx)}{1 + (1/E_{c})(dV_{CB}/dx)} \\ \mathcal{E} \mathfrak{T} \mathfrak{S} \mathfrak{S}_{\circ} - \mathfrak{T}, \\ \mathfrak{F} \mathfrak{B} \mathfrak{T} \mathfrak{H} \mathfrak{B} \mathfrak{T} \mathfrak{H} \mathfrak{T} \mathcal{O} \mathfrak{T} \mathfrak{T}_{DSN} \mathfrak{K} \\ I_{DSN} &= W(-Q_{I}^{'}) v_{d}(x) \end{split}$$

であるから、

キャリア速度飽和の解析(2)

積分の結果、以下を得る。

 $I_{DSN}\left(L + \frac{\left(V_{DB} - V_{SB}\right)}{E_{c}}\right) = \mu W \int_{V_{SB}}^{V_{DB}} \left(-Q_{I}\right) dV_{CB}$ $I_{DSN} = \frac{W}{L} \frac{\mu}{1 + V_{DS}} \int_{V_{SB}}^{V_{DB}} (-Q_{I}) dV_{CB}$ ここで、 $V_{DB} - V_{SB} = V_{DS}$ である。この式を完全対称強反転モデルの式 $I_{DSN} = \frac{W}{I} \int_{V_{CB}}^{V_{DB}} \mu \left(-Q_{I}\right) dV_{CB} \qquad (intersection in the equation is a set of the equation of the e$ とµを一定として比較すると、以下になる。 $I_{DSN,including velocity saturation} = \frac{I_{DSN,not including velocity saturation}}{1 + V_{DS} / (LE_{L})}$

キャリア速度飽和の解析(3)

簡単化されたソース参照強反転モデルの式に速度飽和効果を入れると、

$$I_{DS} = \frac{W}{L} \frac{\mu C_{ox}^{'} \left[(V_{GS} - V_T) V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^2 \right]}{1 + V_{DS} / (LE_c)}, \quad V_{DS} \le V_{DS}^{'}$$

となる。 $dI_{DS}/dV_{DS} = 0$ から飽和時の $V_{DS}(=V_{DS})$ は以下になる。

$$V_{DS} = \frac{V_{GS} - V_T}{\alpha} \frac{2}{\sqrt{1 + \left(\frac{V_{GS} - V_T}{\alpha}\right) \cdot \frac{2}{LE_c} + 1}}$$

また、飽和時の電流は $V_{DS} \in V_{DS}$ に、 $L \in L - l_p$ に置換えて、以下になる。

$$I_{DS} = \frac{W\mu C_{ox}^{'} \left[(V_{GS} - V_T) V_{DS}^{'} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^{'2} \right]}{L \left(1 - \frac{l_p}{L} + \frac{V_{DS}^{'}}{LE_c} \right)}$$

キャリア速度飽和の解析(4)

Lが小さくなると、
$$V_{DS}$$
も小さくなる。したがって、 I_{DS} は
 $I_{DS} \approx \frac{\mu C_{ox}'(W/L)(V_{GS} - V_T)V_{DS}'}{V_{DS}'/(LE_c)} \approx W C_{ox}'(V_{GS} - V_T) \mu E_c$
で近似できる。ここで、 $l_p/L \ll 1$ と仮定してある。
すなわち、 $I_{DS}' k V_{GS} - V_T$ にほぼ比例する。
ここで、チャネル電荷が場所xに依存しなく、一定であるとすると、
 $-Q_I' \approx C_{ox}'(V_{GS} - V_T)$ であるから、以下を得る。
 $I_{DS}' \approx W (-Q_I') v_d|_{max}$

*I_{DS}-V_{DS}*特性:速度飽和の有無



ホットキャリア効果



基板電流vs.ゲート~ソース電圧



ホットキャリア対策(LDDトランジスタ)









定電界スケーリング(1)

デバイスが1/κ (3次元)になる。

 $\Rightarrow L, W, t_{ox}, d_j: 1/\kappa$

空乏層幅も1/кにする。

この場合、動作電圧及び閾値電圧も、 $1/\kappa$ にする。 容量Cは、単位面積当りの増加と面積縮小から、 $\kappa(1/\kappa^2)=1/\kappa$ になる。 また、 γ は以下になる。

$$\Rightarrow \gamma : 1/\sqrt{\kappa} \quad \left[\gamma = \sqrt{2q\varepsilon_s N_A} / C_{ox} \right]$$

$$Q_B^{'} \exists \varkappa \not \neg \neg \nu \not \exists \varkappa \not z \lor \neg_0 \left[Q_B^{'} = -\sqrt{2q\varepsilon_s N_A} \sqrt{\phi_0 + V_{CB}} \right]$$

$$\Rightarrow Q_B^{'} : 1$$

定電界スケーリング(2)

ドレイン電流 $\Rightarrow (\kappa)(1/\kappa^2) = 1/\kappa: \quad (容量) \bullet (\equiv E) \bullet (\equiv E)$ $I_{DS} = \frac{W}{L} \mu C_{ox} \left| (V_{GS} - V_T) V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^2 \right|$ 弱反転領域での $\log I_{DS}$ vs. V_{GS} の傾き (V_{DS} 一定) $\left(n = 1 + \frac{\gamma}{2\sqrt{2\phi_F + V_{SB}}}\right)$

単位面積当り消費電力

 $\Rightarrow (1/\kappa)(1/\kappa)/(1/\kappa^2) = 1: \quad (\equiv E) \bullet (\equiv \pi)/(\equiv \pi)$

定電界スケーリング(3)

容量充電の変化率

⇒ $(1/\kappa)/(1/\kappa)=1$: (電流)/(容量)、dV/dt = I/C容量充電時間

⇒ $1/\kappa$, (::容量充電の変化率=1、電圧: $1/\kappa$) 回路スピード

 $\Rightarrow \kappa$

電力遅延積 (パワーディレイプロダクト) $\Rightarrow (1/\kappa^2)(1/\kappa) = 1/\kappa^3$: (トランジスタ当りの消費電力・(容量充電時間)

定電界スケーリング(4)

配線内の電流密度 $\Rightarrow (1/\kappa)/(1/\kappa^2) = \kappa$ (電流)/(配線断面積) 配線抵抗 $\Rightarrow (1/\kappa)/(1/\kappa^2) = \kappa$ (配線長)/(配線断面積) 配線の容量と抵抗からの時定数 $\Rightarrow (1/\kappa)\kappa = 1$ (配線容量●(配線抵抗) 配線内での電圧低下 $\Rightarrow (1/\kappa)\kappa = 1$ (電流)(配線抵抗) コンタクト抵抗 (コンタクト面積: $1/\kappa^2$) $\Rightarrow \kappa^2$ コンタクトでの電圧低下

 $\Rightarrow (1/\kappa)\kappa^{2} = \kappa \qquad (電流) (コンタクト抵抗)$

定電界スケーリング・ファクター

量	スケーリング・ファクター
デバイス・ディメンジョン L, W, t _{ox} , d _j	$1/\kappa$
面積	$1/\kappa^2$
パッキング密度(単位チップ当りのデバイス数)	κ^2
ドーピング密度 N _A	К
バイアス電圧と V _T	$1/\kappa$
バイアス電流	$1/\kappa$
電力消費(一定の回路当り)	$1/\kappa^2$
電力消費(単位チップ当り)	1
容量 C	$1/\kappa$
容量(単位面積当り) C'	К
電荷 Q	$1/\kappa^2$
電荷(単位面積当り) Q'	1
電界強度	1
基板バイアス係数 γ	$1/\sqrt{\kappa}$
トランジスタ通過時間 て	$1/\kappa$
トランジスタ電力・遅延積	$1/\kappa^3$

スケーリングの規則

	スケーリング・ファクター			
里	定電界	定電圧 スケーリング	準定電圧 スケーリング	ー般化された スケーリング
	~/)//	$1 < \kappa' < \kappa$	$1 < \kappa' < \kappa$	$1 < \kappa' < \kappa$
W, L	$1/\kappa$	$1/\kappa$	$1/\kappa$	$1/\kappa$
t _{ox}	$1/\kappa$	$1/\kappa$	$1/\kappa$	l/κ
NA	K	К	K	κ^2/κ'
V , V _T	$1/\kappa$	1	$1/\kappa$	$1/\kappa$

ソースとドレイン抵抗





ソースとドレイン抵抗を入れたMOSトランジスタ



ソースとドレイン抵抗の解析(1)

実効的なドレイン~ソース電圧VDSは、

 $\widetilde{V}_{DS} = V_{DS} - 2RI_{DS}$

で表される。以下の式において、 $V_{DS} \in V_{DS}$ で置換える。

$$I_{DS} = \frac{W}{L} \mu C_{ox} \left[\left(V_{GS} - V_T \right) V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^2 \right]$$

更に、 $V_{GS} - V_T \sim ORI_{DS}$ の寄与は少ないとし、いま V_{DS} の小さい場合を考え $(\alpha/2)V_{DS}^2$ の項は、無視できるものとすると、

$$I_{DS} \approx \frac{W}{L} \mu C_{ox} (V_{GS} - V_T) \widetilde{V}_{DS}$$

となる。これから、 I_{DS} を解くと、以下になる。

$$I_{DS} = \frac{\mu C_{ox}'(W/L)}{1 + \beta_{R}(V_{GS} - V_{T})} (V_{GS} - V_{T}) V_{DS}, \qquad \beta_{R} = \frac{2\mu C_{ox}'RW}{L}$$

ソースとドレイン抵抗の解析(2)

得られた電流式のµに以下のµ_{eff}を代入すると、

 $\mu_{eff} = \frac{\mu_0}{1 + \theta(V_{cs} - V_{T})} \qquad (ここで、\theta_B V_{SB} を 無視)$ $I_{DS} = \frac{\mu_0}{1 + \theta (V_{GS} - V_T)} \bullet \frac{C'_{ox} (W/L)}{1 + \beta_2 (V_{GS} - V_T)} (V_{GS} - V_T) V_{DS}$ $\approx \frac{\mu C_{ox}'(W/L)_0}{1 + (\theta + \beta_T)(V_{GS} - V_T)} (V_{GS} - V_T) V_{DS}$ となる。ここで、 $\theta(V_{cs} - V_{\tau}) \ll 1$, $\beta_{P}(V_{cs} - V_{\tau}) \ll 1$ と仮定してある。

薄い酸化膜と高ドーピングの効果

(1) 量子効果によるゲート酸化実効膜厚の増大

(量子論によるキャリア分布:チャージシートモデルの限界)

$$\hat{t}_{ox} = t_{ox} + \frac{\varepsilon_{ox}}{\varepsilon_s} d_m, \quad d_m = B_1 \left| Q_B + \frac{11}{32} Q_I \right|^{-1/3} \qquad (B_1 \approx 10^{-9} (\text{C} \cdot \text{cm})^{1/3})$$

(2) ポリシリコンゲートの空乏化

$$\hat{t}_{ox} = t_{ox} + \frac{\mathcal{E}_{ox}}{\mathcal{E}_{s}} \left(d_{m} + d_{p} \right)$$

(3) 量子効果による $|V_{T0}|$ の増大効果(反転層電荷の量子化)

電流式に考慮すべき微細サイズ効果

- ・閾値電圧の変化
 - ・チャネル長Lの影響:短(逆短)チャネル効果
 - ・チャネル幅Wの影響:狭(逆狭)チャネル効果
 - ・ドレイン電圧V_{DS}の影響(DIBL)
- ・高電界による移動度の低下
 - ・ キャリアの表面散乱(電流と垂直方向)
 - ・キャリアの速度飽和(電流の方向)
- ・飽和領域におけるチャネル長変調

微細サイズ効果を取込んだ電流式

実効閾値電圧

 $\stackrel{\wedge}{V_T}\left(L,W,V_{DS},V_{SB}\right) = V_T\left(V_{SB}\right) + \Delta V_{TL}\left(L,V_{DS},V_{SB}\right) + \Delta V_{TW}\left(W,V_{SB}\right)$

非飽和領域の電流: $V_{DS} \ll V_{DS}$

$$I_{DS} = \frac{\mu C_{ox} \frac{W}{L} \left\{ \left[V_{GS} - V_{T} (L, W, V_{DS}, V_{SB}) \right] V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^{2} \right\}}{\left\{ 1 + \theta \left[V_{GS} - V_{T} (L, W, V_{DS}, V_{SB}) \right] + \theta_{B} V_{SB} \right\} \left[1 + V_{DS} / (LE_{c}) \right]}$$

飽和領域の電流: V_{DS} ≫ V_{DS}

$$I_{DS} = \frac{\mu C_{ox}^{'} \frac{W}{L} \left\{ \left[V_{GS} - V_{T}^{'} (L, W, V_{DS}, V_{SB}) \right] V_{DS}^{'} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^{'2} \right\}}{\left\{ 1 + \theta \left[V_{GS} - V_{T}^{'} (L, W, V_{DS}, V_{SB}) \right] + \theta_{B} V_{SB} \right\} \left[1 - \frac{l_{p}}{L} + V_{DS}^{'} / (LE_{c}) \right]}$$

付録

BSIMでのMOSFET閾値電圧 (短チャネル効果:擬似2次元)

閾値電圧導出:短チャネル効果(擬似2次元)



記号の定義と境界条件

Gaussian boxにGaussの法則適用(1)

y方向電界のフラックス

$$\begin{bmatrix} E_{y}(x, y + \Delta y) - E_{y}(x, y) \end{bmatrix} X_{dep}$$

=
$$\frac{E_{y}(x, y + \Delta y) - E_{y}(x, y)}{\Delta y} X_{dep} \Delta y = \frac{\Delta E_{y}}{\Delta y} X_{dep} \Delta y$$

Gaussの法則

$$\int_{S} \mathbf{E} \bullet \mathbf{n} dS = \int_{V} \frac{\rho}{\varepsilon_{si}} dv$$

x方向電界のフラックス

$$\begin{bmatrix} E_x(X_{dep}, y) - E_x(0, y) \end{bmatrix} \Delta y = -\frac{\left(V_{gs} - V_{FB} - V_s(y)\right)C_{ox}}{\mathcal{E}_{si}} \Delta y$$
$$E_x(X_{dep}, y) = 0$$
$$\varepsilon_{si}E_x(0, y) = \left(V_{gs} - V_{FB} - V_s(y)\right)C_{ox}$$

Gaussian boxにGaussの法則適用(2)

Gaussの法則の適用

 $\frac{\Delta E_{y}}{\Delta y} X_{dep} \Delta y - \frac{\left(V_{gs} - V_{FB} - V_{s}(y)\right)C_{ox}}{\varepsilon_{si}} \Delta y = -\frac{qN_{peak}}{\varepsilon_{si}} X_{dep} \Delta y$ $\Delta y \to 0, \quad E_{v}(x, y) \to E_{v}(0, y) = E_{s}(y), \quad X_{dep} \to X_{dep}/\eta$ $-\varepsilon_{si}\frac{\Lambda_{dep}}{n}\frac{dE_{s}(y)}{dv} + \left(V_{gs} - V_{FB} - V_{s}(y)\right)C_{ox} = qN_{peak}X_{dep}$ $E_{s}(y) = -dV_{s}(y)/dy, \quad C_{or} = \varepsilon_{or}/T_{or}$ $\varepsilon_{si} \frac{X_{dep}}{n} \frac{d^2 V_s(y)}{dy^2} + \varepsilon_{ox} \frac{V_{gs} - V_{FB} - V_s(y)}{T} = q N_{peak} X_{dep}$

 X_{dep}/η ⇒ チャネルに沿う空乏層幅の平均 η ⇒ フィッテングパラメータ

表面電位の微分方程式

下記微分方程式を解く

境界条件 $V_s(0) = V_{bi}, \quad V_s(L) = V_{ds} + V_{bi}$ $\varepsilon_{si} \frac{X_{dep}}{\eta} \frac{d^2 V_s(y)}{dy^2} + \varepsilon_{ox} \frac{V_{gs} - V_{FB} - V_s(y)}{T_{ox}} = q N_{peak} X_{dep}$ (1-1)

(1-1)式の整理 (基板電位:グラウンド)

$$\frac{d^{2}V_{s}(y)}{dy^{2}} - AV_{s}(y) = B \qquad (1-2)$$

$$A = \frac{\varepsilon_{ox}\eta}{\varepsilon_{si}X_{dep}T_{ox}}, \quad B = \frac{\eta q N_{peak}}{\varepsilon_{si}} - \frac{\varepsilon_{ox}\eta}{\varepsilon_{si}X_{dep}T_{ox}} \left(V_{gs} - V_{FB}\right)$$

表面電位の解法: 微分方程式を解く(1/5)

(1-2)式の同次式

$$\frac{d^{2}V_{s}(y)}{dy^{2}} - AV_{s}(y) = 0$$
(1-3)
(1-3)式において、 $V_{s}(y) = e^{\rho y} \geq お \leq \varepsilon$ 、
 $\rho^{2} - A = 0 \implies \rho = \pm \sqrt{A}$
(1-4)
 $\geq \alpha \delta_{\circ}$ 従って、以下を得る。
 $V_{s}(y) = C_{1}e^{\sqrt{A}y} + C_{2}e^{-\sqrt{A}y} \quad C_{1}, C_{2}$:任意定数
(1-5)
次に、
 $\frac{d^{2}V_{s}(y)}{dy^{2}} - AV_{s}(y) = B$
(1-6)
の解を、 $C_{1}, C_{2} \geq y$ の関数 $\geq \beta \lambda \zeta$
 $V_{s}(y) = C_{1}(y)e^{\sqrt{A}y} + C_{2}(y)e^{-\sqrt{A}y}$
(1-7)
 $\geq \tau \delta_{\circ}$ (定数変化法)

表面電位の解法: 微分方程式を解く(2/5)

(1-7)式の1階微分は以下となる。

$$\frac{dV_{s}(y)}{dy} = C_{1}\sqrt{A}e^{\sqrt{A}y} - C_{2}\sqrt{A}e^{-\sqrt{A}y}$$

$$\sum \sum \overline{C}, \quad y \in \mathbb{R} \quad \mathbb{$$

$$(1-7) 式 \mathcal{O}2 階 微分は (1-8) 式 から以下となる。
$$\frac{d^2 V_s(y)}{dy^2} = C_1' \sqrt{A} e^{\sqrt{A}y} + C_1 A e^{\sqrt{A}y} - C_2' \sqrt{A} e^{-\sqrt{A}y} + C_2 A e^{-\sqrt{A}y}$$
(1-10)$$

(1-7)式と(1-10)式を(1-6)式に代入すると、以下を得る。
$$C_1 \sqrt{A} e^{\sqrt{A} y} - C_2 \sqrt{A} e^{-\sqrt{A} y} = B$$
 (1-11)

表面電位の解法:微分方程式を解く(3/5)

(1-9)式と(1-11)式から以下を得る。 $C_1' = \frac{B}{2\sqrt{\Delta}} e^{-\sqrt{A}y}$ (1-12) $C_2' = -\frac{B}{2\sqrt{A}}e^{\sqrt{A}y}$ (1-13)(1-12)式と(1-13)式から、以下を得る。 $C_{1}(y) = -\frac{B}{2A}e^{-\sqrt{A}y} + D_{1}$ (1-14) $C_2(y) = -\frac{B}{2A}e^{\sqrt{A}y} + D_2 \qquad D_1, D_2: 任意定数$ (1-15)(1-14)式と(1-15)式を(1-7)式に代入して、以下を得る。 $V_{s}(y) = -\frac{B}{A} + D_{1}e^{\sqrt{A}y} + D_{2}e^{-\sqrt{A}y}$ (1-16)

表面電位の解法:微分方程式を解く(4/5)

境界条件
$$V_s(0) = V_{bi}, V_s(L) = V_{ds} + V_{bi}$$
を
(1-14)式に適用して、以下を得る。
$$D_1 + D_2 = \frac{B}{A} + V_{bi}$$
(1-17)
$$D_1 e^{\sqrt{AL}} + D_2 e^{-\sqrt{AL}} = \frac{B}{A} + V_{ds} + V_{bi}$$
(1-18)

これから、
$$D_1 \ge D_2$$
は以下 となる。

$$D_1 = \frac{1}{2\sinh\left(\sqrt{AL}\right)} \left[\frac{B}{A} + V_{ds} + V_{bi} - \left(\frac{B}{A} + V_{bi}\right) e^{-\sqrt{AL}} \right]$$
(1-19)

$$D_2 = \frac{1}{2\sinh\left(\sqrt{AL}\right)} \left[-\left(\frac{B}{A} + V_{ds} + V_{bi}\right) + \left(\frac{B}{A} + V_{bi}\right) e^{\sqrt{AL}} \right]$$
(1-20)

表面電位の解法:微分方程式を解く(5/5)

 $D_1 \ge D_2 \ge (1-16)$ 式に代入して整理すると、 $V_s(y)$ は以下になる。



 $\sqrt{A} = \frac{1}{l}$

表面電位の解

表面電位のチャネル位置依存性

$$V_{s}(y) = V_{sL} + (V_{bi} + V_{ds} - V_{sL}) \frac{\sinh(y/l_{t})}{\sinh(L/l_{t})} + (V_{bi} - V_{sL}) \frac{\sinh[(L-y)/l_{t}]}{\sinh(L/l_{t})}$$

$$\begin{split} V_{sL} &= V_{gs} - V_{th0} + \phi_s &\Rightarrow & \\ S = V_{gs} - V_{th0} + \phi_s &\Rightarrow & \\ V_{th0} &= V_{FB} + \frac{q N_{peak} X_{dep} T_{ox}}{\varepsilon_{ox}} + \phi_s &\Rightarrow & \\ S = & \\ \\ S = & \\ \\ \end{array}$$

閾値電圧:短チャネル効果(擬似2次元)

 $V_{ds} \ll V_{bi} - V_{sL}$ の場合の表面電位最小位置

$$V_{s\min} = V_s(y_0) \to y_0 \cong L/2$$

最小表面電位

$$V_{s\min} = V_{sL} + [2(V_{bi} - V_{sL}) + V_{ds}] \frac{\sinh(L/2l_{t})}{\sinh(L/l_{t})}$$

閾値電圧 $V_{s\min} = \phi_s$, at $V_{gs} = V_{th}$

$$V_{th}(L) = V_{th0} - \frac{\left[2(V_{bi} - \phi_s) + V_{ds}\right]}{2\cosh(L/2l_t) - 2} \equiv V_{th0} - \Delta V_{th}$$

閾値電圧変化:短チャネル効果(擬似2次元)

近似 $l_t \ll L$

$$\frac{1}{2\cosh(L/2l_t)-2} = \frac{1}{e^{L/2l_t}-e^{-L/2l_t}-2}$$
$$\approx \frac{e^{-L/2l_t}}{1-2e^{-L/2l_t}} \approx e^{-L/2l_t} \left(1+2e^{-L/2l_t}\right) = \left(e^{-L/2l_t}+2e^{-L/l_t}\right)$$

短チャネル効果による閾値電圧変化

$$\Delta V_{th}(L) = \left[2 \left(V_{bi} - \phi_s \right) + V_{ds} \right] \left(e^{-L/2l_t} + 2e^{-L/l_t} \right)$$